

後援会だより

卒業を祝して

ご卒業を迎えた皆さん、おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

このたび卒業を迎えられるのは、学生の皆さん自身のご努力のたまものであることは言うまでもありません。しかし、研究・教育でご指導いただいた諸先生方や職員の方々、そして今まで育ててくださった保護者の方々のご支援のおかげであることも忘れてはなりません。

さて本年度、2010年6月の小惑星探査機「はやぶさ」の帰還はまだ記憶に新しいことと思います。2003年5月に打ち上げられた「はやぶさ」は、2005年に小惑星「イトカワ」でサンプル採取後、地球との通信が途絶したり、イオンエンジンが運用停止寸前に追い込まれたり、幾度となく絶望的なトラブルに見舞われました。しかしそのたびに、プロジェクトスタッフは「もうダメだ」「ここまでなのか」とほとんど諦めながらも、祈るような気持ちで、

共生システム理工学類後援会 役員一同

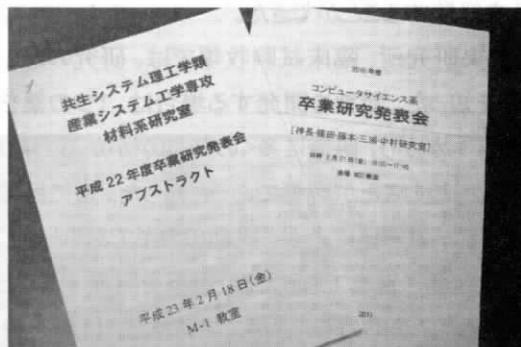
考えられる全ての策を講じて対応し続けたといえます。小惑星サンプルリターン計画を発表したときには「背伸びしすぎの計画」「日本にできるのか」と言われたそうですが、「はやぶさ」に携わる人々の「あきらめない、投げ出さない」姿勢が、人類初のミッションを成功させたのではないのでしょうか。

新しい世界へ踏み出される卒業生の皆さんも、在学生の皆さんも、どうか、これからどのような困難に会おうとも、果敢にチャレンジし、自分なりのミッションを成功させてください。

本年度は、平成5年4月に第1期生として入学された学生の中から、福島大学研究科博士前期課程に進学された皆さんが、修了生として社会に送り出されます。本学類で学ばれた皆さんのこれからのご活躍をお祈りいたしております。



卒業研究発表会の様子



卒業研究発表会資料



インターンシップ体験記

人間支援システム専攻 3年
吉田 義宏

実習期間:平成22年8月23日～8月27日
実習先:日本全薬株式会社
指導担当者:研究管理部・研究管理チーム
物流管理部・業務推進チーム

【実習日程】

実習期間	配属部署	実習内容
8月23日(月)	中央研究所	・中央研究所の見学 ・新薬開発の流れの説明
8月24日(火)	中央研究所	・実験動物管理業務の説明、実習 ・HGF業務の実習
8月25日(水)	臨床試験牧場	・牧場の見学 ・牛舎での実習
8月26日(木)	情報システム部 物流管理部	・物流システムについての説明 ・製品の梱包作業
8月27日(金)	物流管理部	・製品の輸出入について ・製品の梱包作業

●インターンシップで得たもの

私が参加した会社は動物薬の会社であった。その中で私は、中央研究所、臨床試験牧場、物流管理部と大きく分けて3つの部署で実習を行った。薬品や物流について、それぞれの部署で今まで私が経験したことのない多くのことを経験することができた。

中央研究所、臨床試験牧場では、研究の難しさや大変さを知った。新薬を開発する場合は、1つの薬を作るのに何年もかかり、研究に多くの時間がかかる。粘り強く研究に取り組むことが必要であると知った。常に目標を持って研究に取り組むことが、成功のカギであると感じた。多くのお客様に喜んでもらえる、新薬を開発することで多くの動物の命を助けることができるなど、目標を持って仕事に取り組むことで、よりよい製品が開発されるのだと思う。また、研究は効率よく物事を考えて進めなければならないため、研究の順序や計画が重要であると教えて頂いた。1つのことを集中的に進めるのではなく、同時にいくつかの研究を進め、完成までの時間を短くすることが大切だと知った。何事も、段取りよく進めることが重要だと感じた。また、仕事には一人一人が責任をもって取り組まなけれ

ばならない。実験を行う際、実験の準備の段階から集中して行わなくては、ミスが出てしまい実験をやり直すなどの無駄な時間ができてしまう。簡単な作業であっても慎重に正確にしなければならないと知った。

物流管理部では、仕事を効率よく進めることの大切さを学んだ。仕事はスピードが大切で、自分で仕事をしながら覚え、自分で効率のよい方法を見つけることが大切である。私は、商品の梱包作業を体験し、身を持って実感した。マニュアルを覚えることより、自分で考え工夫しながら作業をすることの方が重要であると学んだ。

始めは慣れない環境での実習で不安があったが、多くの社員の方に支えられ、無事インターンシップを終えることができた。インターンシップを終えて、参加以前より成長することができたと思っている。実習中は中央研究所、臨床試験牧場、物流管理部とそれぞれ異なる内容の実習を行ったため、多くの社員の方にお世話になり、様々なお話を聞くことができた。1つの部署について深く学ぶことはできなかったが、部署ごとの仕事内容の違い、役割の違いなど1つの部署だけの実習ではわからなかったことを経験することができた。

インターンシップ体験記

課題としていた、働くことのやりがいや大変なこと、学生時代やるべきことなどについて多くの意見を聞くことができた。また、実習中に分からないことがあったときはしっかりと質問をすることができたと思う。社員の方と積極的にコミュニケーションをとることができたことで、今後に活かせる多くのことを学ぶことができた。

社会で大切なことは、当たり前なことを当たり前にとどとインターンシップを通して感じた。挨拶はもちろんのこと、責任を持って仕事をするなど当たり前なことだが、当たり前にするのは簡単なようで難しい。社会人は当たり前なことを当たり前にしなければ認められない。一人前になれないので、わからないところを人に聞いたり、挨拶を元気よくしたりと当たり前なことがとても大切であると感じた。また、会社では一人一人の責任が重大であるということ学んだ。一人の人が間違えてしまったことが、その人だけの責任になるのではなく、会社全体の責任になってしまうこともある。実験中にミスが起きてしまったら、もう一度実験をしなくてはいけない分、会社に不利益をもたらしてしまう。お客さんから注文を受けた商品の数や種類を間違えてしまったときも同じである。このようなことが起らないように、一人一人が常に責任感を持って仕事をしなければならないと知った。

●大学生生活に与えた影響

インターンシップに参加前と参加後では就職や会社についてのイメージが大きく変わった。社会で大切なことや、会社の雰囲気、仕事の内容、コミュニケーションの大切さなど大学生活では決して知ることのできない多くのことを経験することができた。

インターンシップに参加して、私は今後についてもっとよく考えなければならないと思った。私は以前、大学院に進学することはまったく考えていなかった。理由は、大学院に進学しない人よりも就職が2年間遅れる分、進学しなかった人との差が大きくなるのではないかと考えていたからだ。しかし、この2年の差は大きくないということを教えていただいた。大学院に進学した期間は自分の将来についてよく考えられ、多くのことを勉強できると知った。今

後の進路は自分の一生を決めることなので、後悔しないように、いろいろなことを考えて決めたいと思っている。

また私は今後、英語を勉強していきたいと考えている。会社の社員の方に学生時代に勉強しておくとういことを聞いたときに、多くの方が英語を勉強しておくとういとおっしゃっていたからだ。社会に出てから英語などは必要ないと思っていたが、研究の際に英語の論文を読んだり、海外とのやり取りをする際によく英語を使うということを知った。会社に入ってからでは、勉強をする時間が多く取れないため、時間がたくさんある学生のうちに英語を勉強しておくとういアドバイスをいただいた。会社に入ってから役立つように、大学の講義以外でも英語を勉強していきたいと思う。

●インターンシップに参加する学生へ

インターンシップは学ぶことがとても大きいです。大学生活や講義では決して経験のできない、会社の雰囲気や、仕事の内容など多くのことを経験することができます。大学では学べないことを多く学べるので、とてもよい経験になりますし、よい刺激にもなります。

実際に経験しないとわからないことがあると思うので、積極的にいろいろなことを聞いて、たくさんのことを学んで欲しいと思います。



12月8日 インターンシップ報告会

インターンシップ体験記

産業システム工学専攻 3年
喜藤 広成

実習期間:平成22年9月1日～9月14日

実習先:川俣町役場

指導担当者:産業課・商工交流係副主査

【実習日程】

実習期間	配属部署	実習内容
9月1日(水)	産業課商工交流係	オリエンテーション
9月2日(木)	産業課商工交流係	町長、商店会長あいさつ ヒアリング活動に向けての準備
9月3日(金)	産業課商工交流係	ヒアリング活動
9月6日(月)	産業課商工交流係	ヒアリング活動
9月7日(火)	産業課商工交流係	ヒアリング活動 これからの活動計画について話し合い
9月8日(水)	産業課商工交流係	市街地の活性化についてのまとめ 商工会での中間発表会
9月9日(木)	産業課商工交流係	県立川俣高校へのヒアリング 市街地の活性化についてのまとめ
9月10日(金)	産業課商工交流係	市街地の活性化についてのまとめ 最終報告会に向けての準備
9月13日(月)	産業課商工交流係	最終報告会に向けての準備
9月14日(火)	産業課商工交流係	最終報告会に向けての準備 最終報告会

●インターンシップで得たもの

インターンシップ参加で設定した課題は二つあり、ひとつは公務員として働くことを肌で感じる事。もうひとつは、今回福島大学2名と立命館大学3名の共同作業でしたので、普段接することのできない他大学の学生との共同活動を円滑に進めることでした。

今回の業務内容が、川俣町の中心市街地の活性化について検討するという活動だったせいか、公務員の仕事のイメージである、書類整理などの事務作業は一切ありませんでした。二週間の行動計画も自分達で決めることができ、特に決められた作業というのは中間発表会と最

終報告会をするということだけでした。

活性化策の検討について、僕たちが最終報告会で提案したものは、空き店舗の利活用(チャレンジショップ、商業体験インターン、高校生の商店街へのイベント参加など)や、イルミネーション事業を活用した市街地への人の呼び込み、商店会同士の連携の強化(イベントの共同開催)の三点だったのですが、この三つの案を出すまでに、空き店舗の利活用における補助金はどのようにしたら良いのか、高校生のイベント参加は本当に可能なのかなど、より具体的で実現可能な策にするために本当に苦労しました。このような策の実現可能性を調べるためには、再び

インターンシップ体験記

ヒアリング活動をしなければならなかったし、地元の川俣高校にまでヒアリングに行くこともありました。

来年以降、最終的に出したこの三つの提案が実施され、中心市街地の活性化につながれば、それはもちろん最高のことだと思います。しかし、今回の活動を通してこの提案だけが川俣町の活性化につながるのではないと感じる部分もありました。それは、インターンシップで学生が川俣町に来て活動すること自体が町の活性化につながっていたのではないかと感じたからです。例えば、ヒアリング活動は、主においちゃんやおばあちゃんにすることが多かったのですが、そういった方々が、川俣の歴史や独自の文化などをインターン生に話すことによって、自分達の歴史について自信を持てたり、元気が出たりするのではないかと感じたし(そういった話を身内などにしても、あまり聞いてくれない場合が多い)、商店街の人は、苦情や悩みなどをインターン生に話すことによって、そのすべてではないが、一部を解消することができると思ったからです。また、その土地を知らない学生が調査することによって、そこに住んでいる人は当たり前だと思っていた、その町の良いところや、逆に、危機感を持たなければならないところが分かるという利点があるとも感じました。

●大学生活に与えた影響

今回のインターンシップに参加してみて、自分の中でより一層公務員になりたいという思いが強くなりました。この二週間の活動では、たぶん公務員のイメージとして強い事務作業などはあまり体験できませんでしたが、そのような仕事をする中で公務員が常に心に止めておかなければならない基礎の部分を学べた気がします。また、自分は今、公務員になるために勉強を頑張っているのですが、これから試験までのモチベーションを高めることができたということもこのインターンシップでの大きな収穫の一つだったと思います。

●インターンシップに参加する学生へ

川俣町役場のインターンシップについて、以下に挙げ

る項目に少しでも興味のある人がいれば、来年以降参加してみることをお勧めします。

- 1、公務員として働くための心構えを学びたい
- 2、地域の活性化について興味がある(商店街の現状を見ながらの作業になるのでより現実的な対策の検討をします)
- 3、普段あまり年の離れた人と接する機会がない(ヒアリング活動を通して様々な人達と接するスキルを磨くことができます)
- 4、他大学との交流をしてみたい

自分は、インターンシップが始まる前までは、二週間職場でしっかりと自分の仕事をこなせるのか、立命館大学の学生たちと上手くやっていけるのかなど不安に思うことばかりでした。しかし、活動が始まってしまうと、職場の雰囲気も明るく、立命館大学の学生とも楽しい交流をすることができ、あっという間でしたが、とても充実し、何より活動を楽しめたインターンシップにすることができました。

立命館大学では、4年前から毎年、公共政策実習という形で川俣町役場に来ているそうですが、福島大学の学生が川俣町役場のインターンシップに参加するのは今年が初めてだったそうです。来年以降も川俣町役場のインターンシップは開催されると思うので、福島大学も立命館大学同様に毎年参加者が出れば良いと思います。



12月8日 インターンシップ情報交換会

海外演習報告

REPORT

環境システムマネジメント専攻

川越 清樹

去年に引き続き海外演習の学生引率を担当した。研究室で何気なく海外演習を呼びかけたら2人の学生が海外演習希望という話で、早速、演習の段取りへ…11月にカンボジアで洪水氾濫とその後の水利用を確認する調査予定もあり、同行して演習を行う内容にした。東南アジアということで、海外初体験者にとっては、衛生的に?価値観、文化の違い?から厳しい演習になるのだが、仕事柄でそのような国に行かざるをえない。また、講義の中で頭の中に話しかけても印象が薄いであろう世界各地の水環境の現状を目で見てもらう絶好の機会でもある。

実は、私自身、細心の注意を払い、気苦労の中で生活するのが嫌で、海外自体に興味をもてなかった頃がある。その昔は、バックパッカーをする学生を見て、何が楽しいのかと不思議がっていた。しかしながら、調査を重ねる度に、海外程、気楽に過ごせる場所はない(特に東南アジア)という感覚に陥っている。食料等は甘い料理以外はうまくてたまらない。近年、海外留学の減少や海外に出たがらない学生が多いと聞く。それとは逆行し、私自身は、実際に行って、いろいろな違いを発見することが楽しい状況である。そんなことに共感する好奇心の強いタフな学生さんは是非、うちの研究室に…と宣伝しつつ、詳しい演習内容は彼女達の文章でどうぞご確認を…

海外演習報告(カンボジア プノンペン)

環境システムマネジメント専攻3年 山田 志保

初めての降り立った海外の地、プノンペン空港には大勢の現地の方がおり東南アジア独特の雰囲気と熱気を感じることができた。

メコン川流域調査では、現地の方が運転する自動車でもコン川流域を複数箇所調査した。メコン川を本流とし、コルマタージュ(水門)がある支流をGPSで位置確認し採水、土壌のpH、河川の状態、周辺の状態を調査した。また、支流付近の周辺環境も調査した。どこまでも地平線が続

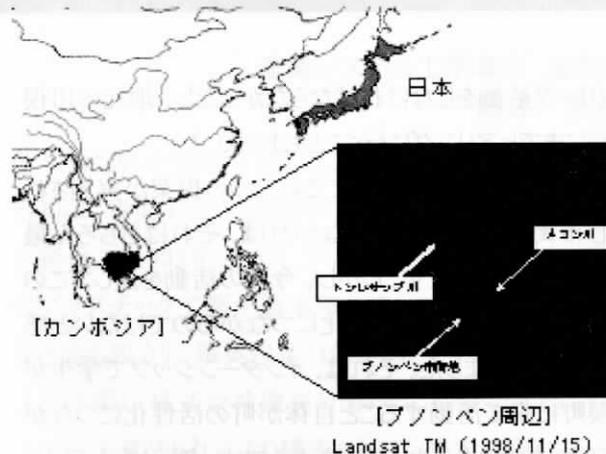


図-1 カンボジア位置図

く大平原の中、日本とは雲泥の差がある農業技術を目の当たりにした。カンボジアでは、いまだに牛を使い農地を耕している状態である。非効率かつ非生産的である印象を受けた。また、支流周辺の住居はメコン川が氾濫するため高床式の造りであった。これには、未だに洪水と共存する文化が伺えた。

また、メコン川とトンレサップ川の合流地点(図-1 位置図 参照)を水上から見学した。合流地点を見ると、トンレサップ川は黒色、メコン川は茶色であり、色の異なりがわかった。トンレサップ川には工場排水・生活排水、メコン川は農地からの肥料・土壌が負荷され、これに応じて水の色が変化すると推察された。

カンボジアは、直射日光が当たるところは暑く、人の動きもゆっくりでどこかのんびりとした印象を受けるが、外国人(観光客)を見ると強引にトゥクトゥクに乗車させようとする人や、物乞いをする人(子供も含む)もあり、日本では身近に感じにくい生と死を強く感じた。また、市街の中心部には、ため池が存在し、間近で観察すると、悪臭がひどいことがわかった。水面も黒色で、一見すると汚染された土壌のようであった。ゴミも漂っており、少なくともこの水を利用し生活することは考えられない。さらに注視すると、この池の近くに住む人は自作ではないかと思われるろ過装置を設置し、池の水を飲料、作物に使用しているようである。日本と比較すると、とてもこの池周辺の居住と利水は考えつかないが、悪条件の中で生活している人がいることに愕然とした。

REPORT

日本に到着し、日本語の会話を聞くと日本に帰ってきたという気持ちになる。初めての海外で、日本の良さを実感できた演習でもあった。



市内の池。黒くヘドロ状である

海外演習報告(カンボジア プノンベン)

環境システムマネジメント専攻3年 渡辺 麻子

プノンベン市内の原動付自転車の圧倒的な多さにとても驚いた。また、それに乗っている人が1人から多くて5人ほどということにも驚いた。移動中は同行した東北大学の先生方からカンボジアの街や建造物、文化などについてのお話を聞いたりもした。その途中で、カンボジアの結婚式会場や日本が建造した橋などを見ることができた。市内を抜けると道端に農業に使われていると考えられる牛がたくさんいた。さらに移動すると、大きな建物もなく、地平線の広がる景色が広がった。山や丘もなく、とても広々としていて、日本とはとても異なる地形なのだと感じ、改めて外国に来たのだと感じた。

現地ではメコン川流域調査をコルマタージュ周辺や河川が氾濫したことでつくられる湖で行った。コルマタージュとは、雨季の氾濫水を農地に利用するために作られた水路である。氾濫水には養分が多く、また氾濫水によって運ばれた魚介類の捕獲も行っているようである。日本が協力して建造したコルマタージュも存在し、水門には日本の国旗が描かれていた。湖は、雨季が終わって間も

なく、一面に水が残っている。乾季が進むと、水が引き、通常の河川となる。湖の岬の下の側面には雨季の時の水位の跡が残っており、雨季の洪水による水位の高さが理解できた。

今まで飛行機にも乗ったことのない私だったので、仙台空港から飛行機に乗るだけでワクワクしていた。そして初めての海外。プノンベンに到着し、空港から一歩踏み出したとたんに、気候の変化と日本人のいない雰囲気を感じた。活動を進めていくにつれて、たくさんの日本との違いを感じることができた。言葉はもちろん、食べ物、地形、街なかの環境など、たくさんのことが日本と異なっていた。言葉は、観光客が多く訪れる場所、特に買い物では英語で何とかやり取りをすることができてよかったと思っている。しかし、お互い何を言っているのか全く分からない状況というのは本当に大変だと感じた。また、今回、同行した東北大学の先生、学生方々とも交流できてよかったと思っている。はじめは緊張したが、3人の先生方からそれぞれカンボジアについてのお話や、海外での体験談など、様々なお話を聞くことができた。

カンボジアでの海外演習で日本にいた時とは違う体験をできたことを忘れず、今後も様々な角度から物事を見られるように心掛けていきたいと思った。



商品が雑然と並ぶマーケット内



海外演習報告

REPORT

産業システム工学専攻 准教授
藤本 典継

平成22年度の第二専攻プログラムによる海外演習として、中華人民共和国広東省を中心とした珠江デルタ地帯を訪問しました。日系企業の進出先は、上海や北京など華北や華東地区が多いですが、製造品出荷額の多さや所得の高さでは、広東省が最も高くなっています。「世界の工場」と言われる中国において、最も工場群が集積しているのが、香港を取り囲むように位置する広東省の珠江デルタ地帯です。参加者は、教員二名(石岡准教授、藤本准教授)と学生5名でした。

日程は、22年8月31日から9月10日までです。初日は移動日であり、福島駅を7:03発の普通電車で出発し、仙台空港に行き、そこから国内線で中部国際空港(セントレア)まで搭乗し、そこで香港行きの国際便に乗り換えました。香港国際空港に着いたのは22:30であり、香港市内のホテルにチェックインした頃は、24時を過ぎていました。

二日目は、サービス業・金融業に立脚した香港の産業構造を実際に確認するために、金融街を訪問しました。金融街は、英語名でInternational Finance Centreと呼ばれますが、香港島北部、中西区の中環地区に位置する複合施設の総称のことです。One IFC(1999年完成)とTwo IFC(2003年完成)と呼ばれる二つのビルがランドマークとなっています。夕方には、香港市内のHongKong MTR駅から、国境の街である羅湖駅にむけて、鉄道で向かいました。羅湖駅から、徒歩で、香港と中国との国境を超えました。徒歩で、中国の広東省深圳市内に入り、そのまま宿泊しました。

三日目は、深圳テクノセンターという、日系企業が集積する工業団地を訪問しました。そこで、センターは、「来料加工」という仕組みにより運営されていることを学びました。工場見学に加え、女性のスタッフから、センターの内実について、色々と教わりました。

四日目は、テクノセンターの中でも、中核的な役割を果たすCHOMEIというプラスチック総合加工メーカーを訪問しました。工場見学に加え、その川副哲社長からも、

色々とお話しをうかがいました。CHOMEIは企業集団であり、当初は、肇英実業有限公司のみであったのが、現在では、日彩化工(1992年設立)、ファインプラス(2000年、旧滑川プラスチック工業が資本参加をしていた偉力工業金型部から独立)、肇英包装(1996年設立)、大崎建設(設立年不明)、株式会社肇英(1997年に持株会社として設立)なども含め6社により構成されています。プラスチック成型金型、プラスチック製品の生産、さらに、工場をはじめとする施設や設備の建設まで、プラスチックの加工やそれに付随する前方や後方の生産過程にまたがる範囲の業務を行っています。グループを統括する川副代表が、プラスチック関連の製品に精通しているのは、もともと、日本の6大化学メーカーである宇部興産系(山口県宇部市で創業し、現在でも同地山口県宇部市に本社を置く総合化学メーカー)のグループ会社に勤務していたということです。社長は、大学卒業後に入社した宇部興産の関連企業で、アメリカや香港などの海外駐在が多かったそうです。その経験により、取引先をはじめとする多方面にわたる人脈を構築し、そのことが、独立による創業に役立ったと語られました。メーカー勤務時代の経験から、「インフラ、サービス面において世界トップの香港と、人件費が安い中国を組み合わせれば必ず利益ができる。」との考えに至り起業したということです。

五日目は、宿泊先のホテルで、それまでの訪問先におけるヒアリング内容をまとめるなど、デスクワークを行いました。六日目は、深圳市のホテルをチェックアウトし、午後から、中国版新幹線に乗り、2010年のアジア大会開催地であった同じく広東省の広州市に移動しました。

七日目、八日目は、教員養成大学として種々の実績を出してきた華南師範大学(広州市)の地理科学院(学院は、日本の学部・学類に該当)を訪問し、また、参加者全員が、それぞれテーマを決めて、研究発表を行いました。師範大学からは、院長(日本の学部長・学類長)、先生方や大学院生が参加しました。八日目の夕食は、師範

REPORT

大学の中にあるレストランで、盛大な中華料理をご馳走になりました。

九日目は、広州東駅前のホテルをチェックアウトし、広州市から高速バスで約2時間30分のところに位置する珠海市に移動しました。

十日目は、台湾系企業であるDIPTRONICS社という、スイッチ専門メーカーを訪問しました。社長は、STEVEN LINさんで、台湾本社では市場調査、製品開発を行っていますが、生産は中国に建設した三つの工場で行っているそうです。工場で生産した製品は香港に一度運ばれてから、世界へ輸出され、デジタルカメラ、MP3、NOTEBOOK、自動車部品、リモコン、家電の部品として使われるそうです。商品の取引先としては、台湾企業だけでなく、ヨーロッパ、日本などの海外企業とも行っているそうです。今回

訪問した珠海工場では、金属加工、プラスチック加工、組立、検査の工程を行っています。また、社長から、盛大な中華料理の夕食をご馳走になりました。社長も流暢な日本語を話され、日本語を話す女性スタッフもいたので、お酒を飲みながらの笑いも交えたコミュニケーションをとることができました。

最終日は、早朝から珠海のホテルをチェックアウトし、歩いてマカオに入りました。マカオからは、フェリーに乗り、香港国際空港まで向かいました。当日は、天気が悪く、フェリーやタクシーなどが順調に進まなかったために、香港発で中部を経由する便への搭乗が間に合わなかったため、香港国際空港から成田空港に到着する便に搭乗を変更しましたが、成田空港経由で日本に戻り、夜には無事に福島駅に到着することができました。



テクノセンターの本部が入るビル



スイッチの大量生産が行われるDIP社の工場



News&Topics

福大ニュース&トピックス ～後援会の皆様へ～大学の情報をお伝えします

★平成22年度学生の表彰式を行いました

福島大学では学業・研究業績、スポーツ、文化・芸術等の分野において、優れた業績をあげた個人及び団体へ、大学特別賞及び学長賞を贈り、学生の表彰を行っています。

宮城県白石市の斎川における水難事故の際に人命救助を行った行政政策学類3年齋藤 龍敬さんへ、迅速的確な活動をたたえ「学長賞」を贈りました。8月4日(水)学長室において、入戸野学長から表彰状とメダルが手渡され、今後さらなる人間力と学力を備えていってほしいとの期待の言葉が贈られました。

齋藤さんは、5月24日帰宅途中に通りがかった斎川で、流されている男性を発見した人と協力し救助活動にあたりました。この日は大雨で川も増水し夜間であったにもかかわらず、危険を顧みず人命救助に貢献し、白石警察署からも感謝状が贈られています。



前列中央が齋藤 龍敬さん 2010.08.04

★経済経営学類 教育GP福大まちづくり株式会社(Marché F)「第2回 街なかマルシェ」を開催しました

県産農産物を利用した取り組みを行っており、地産地産と6次産業化を推進するために、福島県内の直売所や、地元農産物を原料に加工・商品化している取り組みを集めて、マルシェ(朝市)を開催しています。

主催は教育GPの一環で経済経営学類生が設立した「福大まちづくり株式会社(通称:マルシェ・F)」です。

第2回街なかマルシェは、平成22年10月10日(日)・11日(祝・月)に、福島市本町の「街なか広場」で開催され、2日間で来場者は4000人を超え、売り上げも第1回マルシェの倍以上という結果になり、大成功で終わることが出来ました。



第2回街なかマルシェポスター 2010.10.10-11

★広州アジア大会(第16回アジア競技大会) 出場選手が報告記者会見

2010年11月21日から27日まで中国・広州で開催された「広州アジア大会(第16回アジア競技大会)」へ福島大学トラッククラブから出場した選手が帰国し、11月30日(火)、福島大学で報告記者会見が行われました。

会見には、福島大学トラッククラブ監督の川本和久人間発達文化学類教授はじめ、前日夜に福島入りしたばかりの出場選手4人が顔をそろえ、今回の大会の感想や今後の目標などについて話した後、報道機関からのインタビューに答えていました。

青木沙弥佳(H20年度卒→ナチュリル)、千葉麻美(H19年度卒→ナチュリル/旧姓丹野)
渡辺真弓(H17年度卒→ナチュリル)、久保倉里美(H16年度卒→新潟アルビレックス)



左から青木、千葉、渡辺、久保倉選手、川本監督 2010.11.30

★図書寄贈に対する感謝状を贈呈しました

平成22年12月14日(火)学長室において、下平尾勲本学名誉教授の旧蔵書を本学附属図書館にご寄贈下さった同名誉教授の奥様の下平尾婦美子様に、入戸野学長から「感謝状」と今回発行した「下平尾勲寄贈図書目録」を贈呈しました。

下平尾勲名誉教授は、1974年に本学経済学部(現:経済経営学類)に着任後、主として「金融論」を担当され2003年に本学を定年退職し、福島学院大学長を歴任され、同大学短期大学部教授在任中の2007年8月に急逝されました。

本学在職中は、数多くの門下生の輩出だけでなく、学生部長や地域創造支援センターの初代センター長として、大学の運営にもご尽力されました。また、地場産業論の第一人者としての業績も顕著であり、福島県内だけでなく日本国内の地方自治体及び地域経済の発展に多大な貢献をされました。

今回受入れた図書は、本学附属図書館が所蔵している図書との重複を除く、和書365冊、洋書78冊の計443冊です。貸出し可能となっておりますのでどうぞご利用下さい。



前列中央が下平尾婦美子さん 2010.12.14

★キャンドルナイト2010を開催しました

福島大学環境サークル「Laugh Maker」が主催して、12月15日(水)に『キャンドルナイト2010』が中央広場で行われました。

福島大学生協の学食で使用された廃油と、大学内で捨てられた空き缶で作られたキャンドルは約500本。そのひとつひとつに灯された光の中、集まった人達は、音楽系サークル「ハートフルスタジオ」「混声合唱団」などによるアカペラやアコースティックな演奏を楽しんでいました。

3回目となった今回は、～考えようECO のこと、ゴミから灯りへ思いを繋ぐ～をテーマとして、環境サークルが今年行ったゴミ拾いなどの活動を通して感じたことや思ったこと、キャンドルナイトを通して伝えたいことを、集まってくれた人達に伝えていました。



ハートフルスタジオの演奏 2010.12.15

★アカペラサークル「Rainbow Pumpkin」所属グループ『ひだまり職人』がハモネプに出場しました！

福島大学アカペラサークル「Rainbow Pumpkin」所属の男女6名で構成されるグループ『ひだまり職人』が第12回青春アカペラ甲子園 全国ハモネプリーグ(7☆テレビ系列)の最終予選を見事勝ち抜き、全国大会へ出場しました。全国大会へは応募総数723組3642人の中から15組が出場しました。

また、同日夕方の番組FTVスーパーニュース内でも『ひだまり職人』の特集が放送されました。

『ひだまり職人』は、2010年4月に行われたサークルの新入生歓迎会で出会った6人。結成わずか8カ月。悪いところもいいところも認め会えるメンバーです。♪歌があるからつながれる♪



ひだまり職人のメンバー 2011.01.11

後援会の主な事業内容

4月1日～3月31日

課外・教育研究活動助成／専攻交流会・グループ交流会助成／学生活動補助
資格・検定受験料補助／学類運営補助／就職指導対策補助

4月6日 定期総会

6月2日 学業優秀者表彰1年～3年

8月8日 オープンキャンパス

8月31日～9月10日・11月23日～28日 海外演習

9月20日 後援会だより11号発行

10月30～31日 福大祭

10月30日 親のための就職セミナー

12月8日 インターンシップ報告会

3月19日 後援会だより12号発行

3月25日 学業優秀者表彰4年

3月26日 後援会理事会

共生システム理工学類後援会 平成23年度総会のお知らせ

下記のとおり
後援会総会を開催いたします。

平成23年4月4日

午前11時～12時

福島大学共通講義棟 L3教室

資格試験受験実績

TOEIC (カレッジTOEICを含む) 65

公文書管理検定 8

危険物取扱者 5

情報処理技術者 4

知的財産管理技能検定4

日商簿記 3

技術士 2

実用英語技能検定 2

ドイツ語検定 2

電気主任技術者 1

CG検定 1

ファイナンシャル・プランニング技能検定 1

外務員 1

カラーコーディネーター 1

宅地建物取引試験 1

漢字能力検定 1

フランス語検定 1

実用数学技能検定 1



理工学類棟そばに建設中の新棟
研究科の研究プロジェクト型実践教育推進センターや
約100名収容できる大会議室ができます

ご意見・ご要望は下記共生システム理工学類後援会まで

事務局 〒960-1296 福島市金谷川1 福島大学理工学群共生システム理工学類内 TEL&FAX 024-548-8176

学類のHPで様々な教育・研究活動をご覧ください。 <http://www.sss.fukushima-u.ac.jp/>